

はじめまして！ごろ夢でインターンをしている鈴木朋実です。私はこのたび、約2ヶ月にわたり、ペルー、ボリビア、コロンビアを巡る南米旅に出かけました。コロンビアでは、日本文化センター「春のひなた」でのインターンシップにも挑戦します。このブログでは、現地で出会った風景、食、そして人々との出会いや体験を、リアルな記録として綴っていきます。日本とは全く異なる文化に溢れた世界を、ここで皆さんにお届けできればと思っています。よろしくお願いいたします。

---

日本からペルーへ、約22時間のフライトを終え、ようやく到着したリマ。長い空の旅を経て、ついに異国の地に足を踏み入れました。ペルーの首都リマは、約1000万人が暮らすダイナミックな大都市。国の政治や経済をけん引する一方で、近代的な高層ビルが立ち並ぶ都市景観と、太平洋に面した美しい海岸線が共存しています。おしゃれなカフェが点在する人気エリアでは、アートやカルチャーにも触れられ、海ではサーフィンを楽しむ人の姿も。世界的に評価されるグルメシーンも魅力のひとつです。

空港を出ると、早速ペルーならではの味覚を体験。注文したのは、ペルー原産のフルーツ「ルクマ」を使ったスムージー。黒糖やキャラメルのような濃厚で優しい甘さが広がり、一口でその豊かな風味に魅了されました。フルーツの自然な甘みが感じられ、初めてのペルーでの味わいに、心も体もほっと一息。

フライトが遅い時間だったため、この日はこれで終了。明日からはリマの街を散策し、街の文化や風景をじっくり楽しむ予定です。旅の始まりを感じる、そんなひとときでした。



ペルー滞在2日目、リマの Pueblo Libre 地区を歩いて探索しました。まず感じたのは、街の車の多さとそのスピード感。車が勢いよく走り抜ける様子に圧倒されました。特に交差点前には、スピードを抑えるための突起が道路に設けられており、交通の激しさが伝わってきます。街中には駐車された車も多く、ここでは車が生活に欠かせない存在であることがひしひしと感じられました。

昼食には、ペルー風の巻き寿司「MAKI」をいただきました。エビフライとアボカドがたっぷり詰まった巻き寿司の上には、特製のソースがかかっている、見た目も味も日本の巻き寿司とは一線を画す一品。異なる文化が融合した味わいに、新たな発見とともにおいしさを堪能しました。

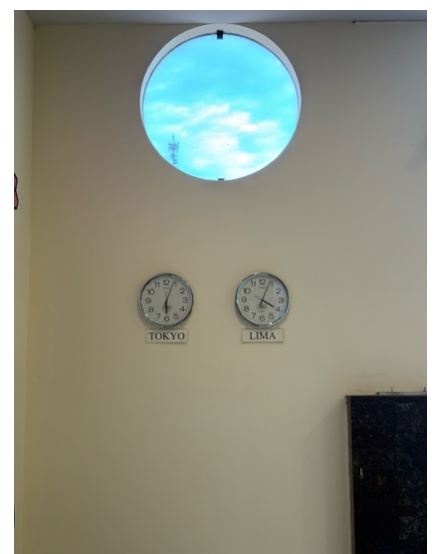




ペルー滞在3日目、訪れたのはリマにある「ペルー日本文化センター」。そこにある全てのものが日本に関連しており、母国に帰ってきたような気分になりました。庭園はまるで日本の風景そのもので、石灯籠や池に映る風景が、異国の地にながら日本の心を感じさせてくれます。館内に足を踏み入れると、日本の伝統工芸品が並び、日系ペルー人学校の歴史が刻まれた記念品が展示されていて、訪れる人々に深い感動を与えています。

驚いたのは、看板に日本語とスペイン語が併記されている点。言葉の壁を越え、二つの文化が交わるこの空間で、両国の歴史的なつながりを肌で感じることができます。さらに、リマと東京の時を刻む時計が並び、遠く離れたふたつの都市をつなげるような不思議な感覚に包まれました。ここでは日本語のクラスや日本語検定の会場があり、日系ペルー人が日本語を学ぶのに訪れます。

センター周辺には「くもん」の教室もあり、日本の教育が根付いていることを実感。文化交流の豊かな場所で、日系ペルー人と日本の深い絆を再確認した3日目の午後でした。







ペルー滞在 4 日目、この日はリマの遺跡と博物館を訪れました。

ミラフローレス地区にある「HUACA PUCCLANA(ワカ・プクジャーナ)」は、街中に突然現れる巨大な遺跡。ケチュア語で「聖なる場所」や「神聖な物」を意味する言葉で、プレ・インカ時代の宗教儀式の場でした。ここを訪れたとき、現代の都市のど真ん中にこんなにも荘厳な遺跡があることに、まず驚かされました。プレ・インカ時代の人々がこの地で祈りを捧げ、儀式を行っていたと思うと、何とも言えない神聖さを感じます。



プエブロリブレ地区にある「Museo de Historia, Antropología y Arte」は、ペルーの歴史や文化、美術を幅広く紹介する総合博物館です。先住民の生活道具や織物、コロニアル時代の絵画まで、多彩な展示が揃い、時代ごとの文化の流れを視覚的にたどることができます。

特にアンデス文明のコーナーは見応えがあり、土地と人々のつながりが伝わってきました。美術品と歴史資料が融合した展示は、過去と現在をつなぐ橋のよう。ペルーという国の奥深さをじっくり味わえる時間でした。





